

### 代替医学と食用きのこの抗がん作用

池川哲郎

長野県農村工業研究所

近代医学の進歩は目を見張るものがあります。しかし癌の死亡率が減少しておらず、いわゆる「生活習慣病」の解決が、課題ですが、なかなかむづかしいのが現状であります。専門家も近代医学の限界と弱点に気付きはじめており、そこに代替医学の早急な導入と普及が必要になっています。ご承知のように、欧米先進国に比べた、わが国では代替医学の導入、普及が遅れていましたが、昨年第一回の本学会が開催されたのは、時代の要請に応じたものであり、今や代替医学は新しい潮流になっています。

古くから不治の病といわれた癌患者が自然治癒することが報告されていましたが、その理由を解明できなかつた。一方免疫学が長足の進歩を遂げ、それは局所的、分析的に考え過ぎてきた近代医学に新しい視点を与え、「こころ」を含めて患者の全体を考える医学へ変換をもたらしてきました。

私が国立がんセンターできのこの研究を始めた頃には、細胞免疫学の黎明期であり、まだB.R.M.(Biological Response Modifiers)という言葉さえなかった時代であります。当時国立がんセンター研究所長の中原和郎先生は癌の化学療法の分野に免疫的考え方を導入されようといっておられた時期でありましたが、先生が癌免疫に興味を持たれたのは、米国で研究されおられた頃からであります。

私も中原先生のご指導のもとに、きのこの抗癌多糖体の研究を始めましたが、当初は果たして多糖体が中原先生の所謂「宿主仲介性」抗癌活性の本体であるかは全くわかりませんでした。現在は一般的になりましたサルコーマ 180の固形癌を用いる抗癌試験法は、その当時の癌化学療法の分野では、若干疑問もありました。同じ癌を用いても、同じ種の動物でも微妙に結果に影響してくることがわかってきました。従って異なった試験法で行った結果を同一の表にして、きのこの活性を論じることはできない。もしそのようなことがあるとすれば、科学的事実を歪曲するものであります。

代替医学は未検証の治療であっても、その結果を検証しつつ、科学的裏付けを求めていくことであり、本学会もその一翼を担うものと思えます。

---

我々は先ず最初にサルノコシカケが癌に効くという言い伝えがあったので、サルノコシカケ科などに属する硬いきのこを取り上げたが、シイタケ、エノキタケなどの食用きのこの方が活性が強く、活性本体の解明が容易であったので、それらのきのこについて研究してきました。その後の広範な研究結果によって、食用きのこの有用性がはっきりと立証されてくると、栽培や貯蔵の技術のなかった時代に伝説が生まれようもなかったのではないかと思うようになったのであります。

エノキタケの生産農家を対象とした疫学調査は、先ず始めに限られた小規模な調査があったが、それを長野県全体の生産農家に拡大し行うよう県農協中央会に働きかけて行われました。その結果、エノキタケ生産農家の平均がん死亡率は、長野県全体の平均死亡率よりも低いことがわかり、きのこの摂取と癌罹患率の関係について考えられるようになりました。この問題については、平成10年度より国立がんセンター研究所臨床疫学部と長野県農村工業研究所が中心となって、長野県厚生連病院が協力して、現在詳しい疫学研究（Case-control study）を実施しているところであります。

一旦食用きのこからサルコーマ 180の固形癌に効くものが見つかり、次々に見つかったもので、それらをどのようにふるいにかけるかが次の問題になります。そこで同系腫瘍に対して経口投与で有効な物質を探すことにして、スクリーニングを行った結果、エノキタケ菌糸体からプロフラミンを見い出しました。また既にエノキタケ子実体から分離していたEA6も同じ様な抗癌活性を示すことがわかりました。

次に取り上げたブナシメジは、「やまびこほんしめじ」として一般に市場に出始めた頃でありましたが、先ずこれまで行ってきた同じ試験法で抗癌活性を確かめた後、きのこ生産農家の疫学調査を踏まえて、きのこの摂取が癌の予防になるかどうかを検討しようと考えました。そして凡そ1年半の観察を続けて、統計的有意差をもって、食用きのこの摂取が発癌予防に有効であることを立証することができました。

私は長年食用きのこの抗癌活性を研究している過程で、「医食同源」、「薬食同源」という言葉に、深く歴史の重み感じてきました。